

ミドルクライシス①ミドルの定義

企業経営漫談士 岡野実空

世界的に有名なA・ピアス『悪魔の辞典』(岩波文庫)をもじった、山田英夫先生の名編著、『ビジネス版悪魔の辞典』によると、「ミドル」は「会社の中で一番多くいる種族で、若くもないが、偉くもない人の総称」と解説されています。ところが、日経ビジネス人文庫から日経プレミアシリーズへの昇格改版に当たり、なんとこの項目は見事にカットされてしまいました。いまやミドルは企業での存在意義をすっかり失ってしまったのでしょうか？ということで、今回は、「若くない」「偉くない」に、「立場ない」を加えて「ミドル」を再定義します。

要素1: 若くない

「若さ」は「心技体」の3側面で考えられますが、まずは「心」から。「精神的」な年齢は「好奇心」の強弱で判定され、子どもように純粋な疑問「なに?」「なぜ?」「どうして?」を維持し続けている大人は、精神的に「若者」。逆になんの疑問もたず、ただ情性で生きている連中は、年齢に関係なく「老人」です。

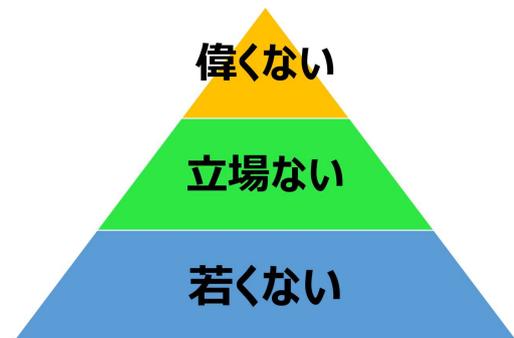
「技」にあたる「知識」や「技能」についても同様ですが、「体」ばかりは本当に正直。食料事情の改善や医療の進歩によって寿命が飛躍的に伸びたとはいえ、だれも加齢を避けることはできません。アンチエイジングなどに血道をあげるのも、伸び悩み消費への貢献という意味では結構ですが、その衰えを自覚し、年なりの知恵やこれまでに培った人脈などで、それを補うことを考えたいものです。

要素2: 偉くない

「ミドル」とは中間の意味ですから、一般的には「部長」「課長」のイメージですが、ここでは会社のトップと新人を除く全ての社員をいいます。「新入社員から副社長より、副社長から社長の距離の方が長い」という権力の実態話はよく知られていますが、「会長」がトップの企業はごく普通ですし、「顧問」「社友」などという(先)輩がウロウロしている企業では、お気の毒なことには「社長」「会長」も実質ミドル扱いです。いま解体の危機にある某電機メーカーの副社長と新聞社主催のセミナーで隣り合わせ、彼がこっそり「T社のチーママです」と自己紹介したときは、どう対応すべきか心底困りました。(後で爆笑!)

「地位」とは「役割」や「立場」の違いに過ぎないのに、「偉い」という「人格」まで含むように錯覚してしまうのは万国共通のようです。もっとも最近、それらが全く別物であることを再認識させられたのは、トランプ大統領最大の功績かもしれません。

E-15 ミドルの定義



要素3: 立場ない

このコラムの冒頭にも書いたように、いまミドルは「存在意義を失う」危機を迎えています。

30年ほど前、同僚のコンサルタントがメーカーで調査した実態は、ミドルの活動の8割以上が組織の上下左右への情報伝達でしたが、いまではその役割がすっかりITに置き換わってしまったのです。

そして残った重要な役割の一つが「翻訳」。社内外に氾濫する情報を分析加工して「知識化」し仕事に役立てること。またトップと現場の中間で、経営の意思を現場に具体化して伝え、逆に現場で起こっていることを集約して、トップの意思決定に貢献することです。(人工知能に負けないう頑張りましょう!)

情報伝達に追われる昔に登場した「戦略ミドル」が、いますっかり姿を消そうとしています。「若くない」「偉くない」が、しっかり「立場はある」。出でよ、シン・ゴジラ!じゃない、「シン・ミドル」!!

平成 29 年 3 月 6 日 実空